

# ヴァレリイの『現代世界考察』 における「精神」の矛盾

佐藤 和生

## I 『現代世界考察』における「精神」の意味するもの

『現代世界考察』の最初のエッセイである『鴨緑江』は、『テスト氏との一夜』を完成して間もなく、『中国におけるテスト氏』を意図して書かれたものといわれている。ヴァレリイの現代世界についての考察は、最初から彼の文学作品と密接な関係をもって行われている。テスト氏は劇場において舞台をみずに観客の表情を観察し、そこに「社会」を動かすものを発見しようとする。彼の考察は、社会的、政治的な概念を一切排除して、素直に自分の感受性を社会的な現実にとらさずことから始める。

こういう態度は、定式化した「見所」というものを避けて事物の差異性を感性との直接的な触れあいによって確かめようとするヴァレリイの方法に従っている。そして、ヴァレリイには、多くの学者や思想家達が試みて失敗した、現代世界についての映像の把握に成功しようという意気込みがあった。『現代世界考察』は、彼の副次的な作品ではない。むしろ、ヴァレリイ論の最初にとりあげるべきものと思う。なぜなら、彼の思想の鍵言葉は「精神」であり、それがまた文学活動の原動力ともなっているため、ヴァレリイの精神が『現代世界考察』においてどのように意味づけられているかを知ることが、結局、彼の文学作品の現代における位置づけを決める糸口になるからである。

といっても、私はヴァレリイの『現代世界考察』を優れたものと考えて

はいない。現代世界考察の象徴主義として、ひとつのエポックを劃するものではあるが、象徴主義の内包する矛盾が最もあざやかに無残な形で露呈しているのも、この『現代世界考察』においてなのである。『鴨緑江』や、その翌年に書かれた『方法的制覇』の時期においては、ヴァレリイの方法はまだドイツ、イタリー、日本、中国などの全体主義方式の驚異を予言する威力をもっていた。ヨーロッパの植民地政策によって、当時の後進国が急速にヨーロッパ化し、逆にヨーロッパに対して戦を挑むことになろうという警告を発することができた。そういう予見は、経済力、軍事力において一日も早くヨーロッパの水準に達しようという意欲に、集団を動かすための合理的な方法が適用された場合に結果するものを、無思想的な、力学的な見地から考察することによってえられた。それは、急速に発展しつつある後進国に秩序への強い欲求が見だされたから可能なことであった。

しかし、第一次世界大戦を経験し、戦勝国も敗戦国も近代戦の激烈さを知ったあとで書かれたエッセイは、（それらが、『現代世界考察』の大半を占める。）未来の世界についての予見不可能を表明し、結論を拒否したもつばかりである。彼は、平和時における混乱状態を無秩序のままに映像化し、ヨーロッパ文明の消滅というイメージにとりつかれている。彼には、中世の僧侶たちのように、世界つまりヨーロッパの終末に脅かされつつ、祈るような気持で書いているという意識がある。

そしてヴァレリイの終末観の特殊性は、現代世界が「精神」との関連においてのみ考察されているという点にある。彼が喚びおこす廃墟の映像とは、広大な台地の上でヨーロッパの知的なハムレットが数百万の亡霊を見つめているというものである。彼の取りあげる頭蓋骨は、リオナルドであり、ライプニッツであり、カントである。ハムレットはそれらの頭蓋骨をどうしてよいか分らぬままに言う。「さようなら、亡霊たち。世界はもうお前たちを必要としない。この私をも必要としない。その宿命的な精密化の傾向に進歩の名をかぶせた世界は、生の恩恵に死の長所を加えようと努

めている。」(『精神の危機』) また、ヴァレリイが空想する破壊のイメージは、世界中の紙という紙を壊滅してしまう不思議な病気についてである。それは紙幣、証文、条約文、公文最、法典、詩、新聞などを消滅させ、社会生活を崩壊させてしまう。ヴァレリイは、この幻想的な仮定によって、人間社会の精神性の弱点を見事に描いた。なぜなら、彼によると、人間社会を支えているものは信頼や信用などの神話であるから。

そして、ヨーロッパ文明の不可避的な結果である戦争による文明の自滅という、現代ヨーロッパ文明観の常套的な逆説を個性的にしているのは、「精神」の破壊を世界の壊滅の映像にまで拡大してみせた点にある。ヴァレリイの考察が純粹に人類中心的な (antropocentrique—P. Roulin) ヒューマニズムと呼ばれるわけがここにある。

しかし、彼の警告が世界についての虚無的な幻影にとりつかれてなされたものであるとしても、そこから彼を反・現代的な思想家とみなすことは誤りである。ヴァレリイには「精神」にたいして楽観的であるところもみられる。しかも、彼の「精神」が現代の産物であると同時に現代を一層おし進めるものである限り、現代を是正しようと試みることはできてもそれを否定することはできない。彼は現代戦の破壊力に注意をむけるとともに、平和時における戦争、つまり創造上の競争についても述べる。従って、戦争についてのヴァレリイ的定式とは次のような表現にある。「戦争が生活 (vie) に一致するということには異論の余地がない。なぜなら、生活の烈しくまた役にたつ破壊は生活の法則であるから。」(『ヨーロッパの偉大と頽廃』についてのノート) だから、J. Robinson とともに、私もヴァレリイをニヒリストと限定するつもりはない。彼の「精神」は常に方程式の零を目指しているが、それは人間の精神活動の「形態」(forme) に関心をもっているためなのである。虚無の映像も、ヴァレリイの「精神」の形態の一つである。

そして、ヴァレリイの「精神」が現代世界の映像をとらえることを可能

にしているかどうかみるには、彼が「精神」をどう規定しているかをみる必要がある。彼がしばしばくりかえす「精神」の定義は、「物質的な、また感情的なすべての事物の変形、変質」を行う力である。（『精神の政治学』）変化を求めるといふ「精神」の属性が、秩序と無秩序をもたらす。それは、無秩序を排して秩序をもたらそうとする方向に作用するだけでなく、自明な事実に対して疑いをもたせようとする。「精神」は本質的に叛逆的なものとみなされている。「決裂する危険のない党派はなく分離や相違や反対は精神の存在を保障する作用であって、それはしばし一致が続いたあとで必ず生ずる。」（同上）精神は充ち足りることを知らない、常に不安定な性質をもつ。ヴァレリイは、精神によってなされる反・自然的な諸結果だけが人間性を保証するものであると考える。彼は、「精神」の反抗的な行為を「自然に対する巧妙な侵犯」(l'attentat savant contre la nature)とよんだ。それは論理やモラルの決定論に叛逆する傾向をも広く指す。精神は秩序を求める時でさえ叛逆的であるという。それは人間と事物の可能性を探る。「人間は仮のことや純粋な可能性においてしか自己を知ることがない。」（『自由の変動』）ヴァレリイによると、偉大な精神とは本質的に懐疑的であり、懐疑は現状を破壊する可能性をもとめる。彼の懐く「精神」の映像は現代世界についての映像と同じく、混乱と破壊そのものである。

それは、ヴァレリイが精神の起源を小宇宙である人間の肉体のうちに置いているからである。「精神は最初に感覚によって刺戟されるのであり、そして、その変換する力を発動するのに必要な本質的に不安定な性格を、感覚によって与えられているのである。」（『精神の政治学』）彼は精神を感性との関連において考察している。彼には肉体が精神にとって把握できないものに思われる。肉体には我々の意志と能力では認知できない領域がある。精神は不可解なものから刺戟をうける。肉体には、第四次元の世界とも言うべき神秘的なところがあり、精神の能力は肉体にとって限定されている。精神は肉体の潜在的な暴力によってふりまわされることもしばしば

である。（テスト氏の意識がこの神秘に達することができた瞬間、彼には自分の肉体が内側から光りだすように思われる。）肉体を全体として認識することは不可能で、それは絶えざる検証と推論に委ねられている。そういう事情が、ますます精神と肉体の類似性を明らかにする。精神は外界と自己の現実について完全な認識に達することは不可能であり、P. Guiraudも言うように、「精神とは何か」という設問が、ヴァレリィの生涯と作品のライト・モチーフであった。彼にとって精神は洞察し予言することを保留すべきものを必ずもっている。存在の根拠をさぐり、動きのタイミングを測定しても失敗するような内容を備えている。精神についての考察もまた或る限度をこえると予見不可能である。

そして、ヴァレリィにつきまとう現代世界の映像と「精神」との同一性が、彼に「精神」を現代世界考察の基準とするための保証となっている。

「現代世界は人間の精神に似せて作られている。人間は自分の周囲の事物を自分自身と同じように、すばやく、不安定に、動的にするために、また自分自身の精神と同じように、感嘆すべき、愚かな、当惑させる、不思議なものにするために、必要な方法と力のすべてを自然のなかに求めた。」（『我々の運命と文学』）人間が率先して自然力を調整しながら、人間社会を自分の精神に類似したものに形成していく。精神は、自分の似姿を社会的な事物や人間に求める。人間は精神の諸属性をモデルとして社会を変化させようとし伝達行為をする。ヴァレリィの理想とする管理機構は、「思考のように」すばやく確実に運行しなければならない。また、彼は物質的な環境から精神への働きかけも考慮しており、地中海文明を説明する場合などには、物質と精神との発展に関して並行論的な言い方もするが、やはり、精神が主導権をとって人間社会は前進してきたとみなすのが、彼の現代世界考察における不動の立場である。「まず精神が始まったのであり、またそうでない筈はない。この世界における最初の商業は必ずや精神の商業であり、すべての商業はまずそこから始まったに違いない。」（『精神の自由』）

そして、精神の産物である記号や象徴によって現代世界が維持されているとみる点を、私は文明批評の象徴主義とよびたいのである。現代的な信託の様式を媒介として、人間の精神と社会とが照応する。色々な概念によって隔てられている人間の内部と外部の垣根がとり除かれ、感性による印象と世界の映像が適合する。精神的な小宇宙と物質的な世界がともに破滅の危機感に脅えている。双方とも認識不可能のうち自己を見失い、仮説的なものに頼っている。そして、これらはお互い他方なしには自己を存続させることができない。社会的な符号の価値が地に墜ち、社会的な力関係が「純粹現実」として姿をみせた時、社会的な象徴主義は意義を失う。ヴァレリィは大戦を通じてそういう機会に幾度か立会いながらも、なお社会の仮構性に信を置いている。『精神の自由』（1939年）というエッセイでは、株屋の用語を使って、精神の価値と石油や小麦などの物質的な価値とを対応させている。G. Bachelard が言うには、「哲学者は内部と外部によって存在と非存在とを考える。」（『空間の詩学』）ヴァレリィもまた精神性の存在が社会的な規模において周期的に非存在に帰するというイメージにとりつかれていたものと思われる。また、O. Spengler によると、小宇宙的な存在である人間が大宇宙に関係をもつのは、周期性を特質とする大宇宙のなかでの自分の位置を規定して、そこに参加することによって可能とされる。ヴァレリィは、社会的な符丁の出没を精神的産物の生産と消費とみなしていた。記号や象徴が精神と現代世界をむすぶ橋わたしの役目を果している。こういう構図は、社会的符丁の変化はあっても存続するだろうというのが、ヴァレリィの考察の結果であったと思う。

ヴァレリィは現代世界において「精神」がどのような役割を果すべきだと考えていたのだろうかということが、次の問題となろう。まず、彼は『テスト氏との一夜』や『方法的制覇』を執筆していた頃から実際の政治活動に加わることを考えていた。「精神」とはヴァレリィにとって人間としての権利や価値を知るためのモラルの意味をもっていた。理想的な社会

は人間社会を変革するために各自の素質に従って「精神」の可能性を充分に実践できるようなものをさした。そして、「精神」は「普遍化された政治」(la politique généralisée)の一分野として政治にあずかることを希望した。政治は彼の従うべき「怪物」の一つであったという。彼は自分の色々な考えを公共的な仕事において試す機会を与えられなかったことを残念がっている。ヴァレリィは職業の関係から実際の政治にはよく通じていたので、自分ならもっと優れた政策をとることができたのにと考えることもあった。職業的な政治家には想像力が欠けており、社会が生みだした「創意に富む精神」を活用するすべを知らないと嘆く。ヴァレリィには政治的能力への自信があった。「私はしばしば政治的秩序において良いことをすることができただろうというはっきりした感じをもったものである。」(傍点はヴァレリィ、『ノート』, 1943年)

しかし、政治活動は本当に自分の関心事ではないという自覚とやはり成功への危惧から賢明にもそれを断念することになる。現代世界の無秩序を正すという実際の仕事から遠ざかって「精神」は芸術、思想、科学などの知的分野に携わる。世に言うヴァレリスムの本領である。結論を拒否している『現代世界考察』のエッセイにおいても、遠慮しがちではあるが、知性への期待は随所に認められる。『精神の政治学』は、次のような言葉でしめくくられている。「要するに、昨今の事情に基づいて未来を予見することが、ますます無意味に、また、ますます危険になって行く。しかし、何が起るか分からないことを覚悟して、すべてに或は殆どすべてに対して備えておくことはやはり賢明であり、それが私の最後に言いたいことである。我々は我々の精神や心のうちに、明確さへの意欲と知性の清澄さと人類が着手している驚異的な冒険の偉大さ及び危険の実感とを保っていないなければならない。人類がその自然の原始的な諸条件から或は法外に遠ざかりつつ、どこをさして進んで行くのか、それは私には分からないのである。」知性の功利性を無視し、知性の器械体操とよばれる純粋な知的活動に参加

しようとすることによって、現代世界の無秩序に対抗する。ヴァレリィの詩作には、精神の自意識への没頭が社会との関連において結局は貢献することになるという自覚があった。最初のエッセイである『鴨緑江』の結末においても、中国におけるテスト氏とみなされる「私」は、中国の文人との現代についての対話をおえたあと、詩的な夢想に耽り、動きと言葉の調和した世界を作りだそうとする。ヴァレリィの生活と思考の関係図は二十歳前後に固定してしまった観がある。志願兵としての一年間、彼は日曜日を「精神の日」と名づけ、早朝から廃園の奥に一人でこもって詩作に耽ったり、フランス軍隊の再編成の計画をたてたりした。職務は彼に知的なものの魅力と刺激とを供給しなかった。いわゆる「沈黙の時代」の二十年間には、一方で職業に勤勉でありながら、毎朝五時から三時間、「ランプと陽の間の思索」を行う。二五七冊のノートの一部を読んだだけでも、それは記録風のものではなく、些細な事柄が非文学的な思索によって抽象的な様式を獲得したものであることが分かる。

そして、ヴァレリィの文学の制作動機にも、現代の混乱に最後まで抵抗しようとする意識があった。『若きパルク』は、第一次世界大戦中の一種の抗抵の記念碑である。「私は十二音綴の詩を作っていた。その時、戦争になった。そうして、戦争の体制が敷かれ不安が毎日を支配し、それは消え去らなかった。皆と同じように、私も精神の自由を失っていた。思索よ！ さようなら——その間、私は色々な事件を想像したり無力なために消耗したりすることに対抗する方法は、一つのむずかしい賭事を強いてやることであると考えた。それは色々な条件や約束をもち、厳格な規則を敷かれた限りのない労作のことである。私は、詩を私的な憲章としてうけとった。私は最も古典的な体制をとった。私はその他に、調和の持続や措辞法の確実や、一つ一つ選り分け計量し思う通りにされた言葉の正確な限定などを自分に課した。私は弱ると自分を励ました。二十ぺんもうっちゃったろうか。私は義務と自尊の念を助け船に喚んだ。私は、私達の土地のた



めに戦う代りに、少なくとも私達の言語のために役立つなければいけないと、最も純粋な言葉と最も高貴な形態とを備えた多分減じるであろうところのつつましい記念碑をこの言語のために建立しなければいけないと、自分に信じこませようとして心を慰めていた。シャラビアの不安な海辺で作られた、日付のない小さな墓……」（1917年、A. Mockel 宛）この詩のもつ「オリnposの清澄さ」（デュアメルの評）は深い社会的変動にたいする苦しい抵抗から生れた。しかし、詩の内容は時事的なものから最も遠く、主題は自意識であるといわれている。ヴァレリオの詩作は制作活動そのものが目的で、それによって精神の可能性を拡げようと図った。こういう詩作は彼がボウの文学的制作のなかにみた近代詩人の矛盾と同じものであった。一方において、近代の野蛮と迷信を告発しながら、他方において、近代的な分析と構成を文学制作に要求した。そしてヴァレリオの場合にはそういう仮構物も絶対的に堅固なものではないという不安を常にもっていた。

また、ヴァレリオは『現代世界考察』の大部分が書かれた1930年代の初めから、知的方面における社会活動に携わるようになる。知性協働委員会議長と地中海大学センター管理人という大役である。知性協働委員会の主趣は、思想の形成と表現に従事している人々が知性上の「秩序」を生み出すために理解しあうことができないかどうかということであった。知識人達の間で普遍的な秩序の問題について意見の交換をしようとするものである。とりあげられた議題は、「文明の将来」（1933年）、「ヨーロッパ精神の将来」（1934）、「現代人の形成」（1935年）、など、ヴァレリオ自身のエッセイの表題にしてもいいものばかりである。地中海大学センターについては、『現代世界考察』のなかに詳しい見積書が載っているが、地中海という恵まれた環境がもたらす知的な対象の多様性をできるだけ広くとりいれながら、知識の増殖と調整を図ろうとするものである。P. Roulin は、「ヴァレリオと社会参加」という章において、ヴァレリオの晩年の社会的活動にはテスト氏の時代とは格段の違いがあることを指摘している。

ヴァレリイは、精神の可能性を探るという主題を完うするためには孤独な思索に耽ってはいけなことを自覚していた。「もし自分の精神に広さと深さにおいて働きかけた人が、その組織された精神を役立てている世紀のなかに参与しないとしたら、彼は自分の獲得された構造が自然な日々の解体にもどるのを見る危険を冒している。なぜならその後、精神の本性の、自然発生的で未だ形をなしていない状態にもどるのを妨げることができるのは外部の生活しかないからである。」(傍点はヴァレリイ、『ノート』1942年) ヴァレリイは精神が獲得したものを社会的に実現しようとしなければ、それは動揺をきたし、やがて自壊するという。

## II 『現代世界考察』における「精神」の矛盾

ここで、ヴァレリイ的な「精神」による現代世界考察の含む矛盾について考えてみたい。そのことは、ヴァレリイの現代世界考察が彼の文学作品や詩論などと同じく「精神」を基準としたものであるから、結句、ヴァレリイ的な「精神」の矛盾について語ることになる。そして、『現代世界考察』は文明、政治、歴史、文学など広い分野に亘っての考察であり常に「精神」という係数をもって仮構したものであるだけに、彼の精神の適応できる範囲をかなり正確に規定することができると思う。

矛盾の第一は、現代世界の普遍的な問題を考察することを意図しながら、実際にはその考察の鍵言葉である「精神」は特権意識に支えられ、またそれに奉仕するものだという点である。ヴァレリイによると、「精神」の自意識の最高段階にある知性に関連してでなければ、現代社会は彼の関心をひかなかつた。従って、人類全体の幸福についての考察は、彼の視界に入っていない。M. Raymondはこの点で彼をラ・ロシュフウコーの冷淡さと比べている。ヴァレリイは人類全体に共通した主題を設定しなかつた。本来の社会的な問題は本当にヴァレリイの思想上の重要事ではない。「ヨーロッパ、政治、文明に関するヴァレリイのエッセイを我々の時代について

の説明の、普遍的な一つの試みとして提出することはとんでもない誤りであろう。いいや、この主観的な思想家は、すべてを知性との関係において彼の観点を選んだ！彼の注意のすべてをとらえているのは、精神の未来であり、人間の権力である。文明の将来、或は終末という大問題、それは彼自身の大問題である。」（『ポール ヴァレリィと精神の誘惑』）政治や経済上の不平等がヴァレリィの問題にならないのは、彼が人間の知性上の不平等を認め、優れた知性をもつ個人にしか人間としての責任を問わないからである。彼は、知性上の不平等は社会の成立にとって必要なものと考え、社会の無秩序を正したり抵抗したりする存在としての優れた知性にしか喚びかけない。そして、功利性を離れた知性の贅沢は少数の者だけの享有すべきもので、多数者にとっては何ものでもないと考えている。彼は、M. Bémol が「心理・代数学のデモン」（*démon psycho-algébrique*）と名づけたものによってすべてを方程式に還元することを知性にとっての理想と考えている。代数学においては、諸関係の「素材」は問題ではなく、記号によって表現される諸関係の「形態」（*forme*—有理斉函数）だけが重要である。ヴァレリィが思索の客観性をもとめるのは純粹に諸関係の形態のなかだけである。そして、彼が素材の観念に対立した形態の観念を示しているのは、美学にも科学にも世界観にも共通した普遍的な観念としてなのである。J. Robinson は、ヴァレリィのノート類にみられる「精神」を分析して、代数学者に類似した発想によって彼の思索が統一されていることを認めており、ヴァレリィと同時代の数学者の発見に彼の思索は対応している点を指摘している。しかし、代数学では普遍性をもつ「形態」によって現代世界を考察する時、その視点はきわめて特殊なものになってしまう。彼は、ヨーロッパの植民地政策が完成して世界に新しく開拓する余地のなくなった時期を「関係の時代」（*période de relation*）とよんでいるが、そういう領土の力関係を生んだものは、天然および人口資源という素材の量的なものではなく、ヨーロッパの科学という質的なものであるという。そして、

ヴァレリイにとって現代の危機とは、質的な均衡が量的なそれに還元される恐れをさす。「世界の人間が住みうる諸地方の等級決定は、ありのままの物質的大きさ、統計の諸要素、数字（人口、面積、重要物質）などが、結局それだけで地球の諸地域の等級を決定する、そのとおりのものとなる傾向がある。」（『精神の危機』）従って、素材を無視し諸関係の形態にのみ関心をもつヴァレリイにとっては、政治的には植民地政策の一層の推進をねがうと同時に、後進国がヨーロッパ的方法を獲得して豊富な資源に見合った力をもつようになるのを遅らせるよう期待するのは当然である。

同じことは、民主政治を皮肉り、独裁政治の「方法」に興味をもつという意識についてもいえる。民主政治は中庸のものを最良のものとしなすという揶揄は、知性のみを基準とする観点からでている。ヴァレリイは政治を「有機心霊的」(organo-psychique)なものとして考察しており、政治機構と身体組織を関連させて述べることが多いが、彼の注意は脳組織と神経系統に集中している。そして、それらの機能を最高度に発揮するものとしての独裁政治に関心をもつ。『現代世界考察』には民主政治を主題としたマッセイはひとつもないが、独裁政治を主題にしたものは二つある。ヴァレリイによると、独裁政治が出現するためには二つの要因が必要であるという。社会的な無秩序が続いてどうにかならないかという雰囲気は民衆を支配していることと、自分の推理や夢想を国家の権威にまで高めようとする極端に自己本位的な一人物が出現することである。そして、国民のなかで独裁者だけが自分の能力を自由に完全な形で発揮することができる。自我と国家は通常では対立するものであるが、独裁政治においては全国民の中でただ一人、独裁者だけが自我を純粹に発展させることができるという。ヴァレリイがナポレオンに魅かれて、しばしば彼を引き合いに出すのも、こういう種類の独裁者としてである。「彼（ナポレオン）は聴き手たちに言った。彼は彼が自分の考えたり決心したりする能力のなかに見出すところの構造や諸機能をこれから創るべき有機的な制度、機関のモデルと

するであろう。また彼は国家が知覚、同化、同行などの色々な手段、或は器官をはっきりと所持するような仕方管理機構を組織するだろう。そして、それらの手段や器官は、明晰で実際の精神が、絶えず訓練されている感覚や筋肉によって援けられているような一人物の生命を確かなものにする、と。」(『独裁の観念』) ヴァレリィが初期のエッセイで、当時の後進国の全体主義方式の出現を予言することができたのも、マッスとしての民衆に純粹自我の考案する方法を適用したためであった。彼の政治的な予言力はファシズムの上昇期には有効である。しかし、終戦から平和の時期にかけては独裁の観念は薄れ、ヴァレリィ的な自我を政治的な分野において実現する可能性は遠ざかる。

そして、芸術や科学の領域において純粹自我を生かすことに期待するようになるが、そういう知的活動は純ヨーロッパ的なものであり、しかも特にフランスの知識階級の一部のみ対象としたものである。ヨーロッパという狭い地方が世界の等級分類の首位を占めてきたのは、住民の品質によるものとヴァレリィは考える。彼にとってヨーロッパ的とはほぼギリシヤ的ということであり、ギリシヤ的とは科学的ということであった。彼は地中海文明の特色を生活の源初的な自然状態から最も遠ざかったものとみる。そして、「広大な身体の頭脳」であるヨーロッパが「アジア大陸の小さな岬」という現実に失墜するのを防止できるのは知性の鍛錬のみであると考えている。ヴァレリィは、世界におけるヨーロッパの位置をフランスが縮小し精密化した形でヨーロッパにおいて占めているとみなす。「フランスは純粹な形態にたいする、形態そのものにたいする心遣いが近代において残存し支配したおそらく唯一の国である。形態を尊ぶ感情は批評精神や精神の懷疑の性質と結びついて現れるところの最も多い、精神の色々な情熱であるように私には思われる。」(『フランスの映像』) 更に、フランスの中のパリが、パリの中のアカデミーが、というように知性の集中化が行なわれる。現代の特殊なものゝの雑多な寄せあつめを綜合して、複雑な均衡を

保ちつつ統一を実現する「形態」としての緊密さがますます強まる。そして、日々の思索をノートに書きこむヴァレリィは、アカデミシャン以上に特権的な人間であり、この純粹に「精神の時間」が彼の出発点でも終着点でもある。彼の『現代世界考察』はそういう位置を確保するためのものである。

ヴァレリィ的「精神」の矛盾の第二は、「精神」は現代世界の無秩序に警告を発しながら、それ自身は無秩序を強く求めるということである。彼の認識論は、精神の無秩序という理解に基礎を置いている。事物と意識、存在と非存在、現実と想像などの対立や照応が、「精神」の可能性の追求には必要な資源である。精神は現実の秩序の枠組をこえる可能性を求める。彼の現代世界についての考察は、結句、可能な世界の映像を追うことになる。それには「精神」の激しい破壊力が要求される。ヴァレリィは、精神の働きにおいては創造力よりも破壊力に援けをもとめている。「破壊する力は造る力よりもはるかに優れている。なぜなら、それは世界の最も強力な法則に完全に一致しているから。」(『雑録』) 従って、「精神」は混乱状態を促し、そこから発生するものを予見しようとする。混沌のなかに「精神」にとっての豊かな礦脈を探り、偶然の組合せから未来の現実を予測する。ヴァレリィには、現代世界についての考察は確実な現実性をもったものではなく、一つの仮説としか考えられなかった。そして、晩年のヴァレリィには P. Roulin も言うように「方法的制覇」を書いた頃の「精神」の価値にたいする尊敬の念が、二つの世界大戦を経験したあとでは跡かたもなく消えたのではないかと考えられる。ヴァレリィの全作品を現代世界にたいする証人であり審判官でもある者の作品として跡づけた Roulin は、晩年のヴァレリィの「精神」にたいする絶望が「我がファウスト」のなかにこめられていると述べている。

註 ここで問題にした『現代世界考察』は “Regards sur le monde actuel” (Gallimard, 1945) の他に, “Lapolitique de l'esprit” など, 文明批評的な内容の文章を含む.

主なる参考文献

Paul Valéry : Lettres à quelques-uns (Gallimard, 1950)

Pierre Roulin : Paul Valéry, témoin et juge du monde moderne (Langages, 1964)

Marcel Raymond : Paul Valéry et la tentation de l'esprit (Langages, 1964)

Jacques Duchesne-Guillemin : Études pour un Paul Valéry (Langages, 1964)

Judith Robinson : L'analyse de l'esprit dans les Cahiers de Valéry (Librairie José Corti, 1963)

Lucienne Julien Cain : Trois essais sur Paul Valéry (Gallimard, 1958)

Maurice Bémol : La méthode critique de Paul Valéry (A. G. Nizet, 1960)

Maurice Bémol : Variations sur Valéry (A. G. Nizet, 1959)

Oswald Spengler : Le déclin de l'Occident (traduit de l'allemand par M. Tazerout) (Gallimard, 1943)

Gaston Bachelard : La poétique de l'espace (Presses Universitaires de France, 1964)